

グリフィス訳浅文理新約聖書の版本とその訳文について：『馬可福音』からの考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 崇弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/9519

グリフィス訳浅文理新約聖書の版本とその訳文について

－『馬可福音』からの考察－

永井 崇弘*

はじめに

プロテスタントによる聖書の漢訳出版は1810年のR. モリソン (Robert Morrison) による使徒行伝や同年にインドのセランポールで出版されたマーシュマン (Joshua Marshman) とラサル (John Lassar) によるマタイの福音書、マルコの福音書、使徒行伝に始まる。その後、プロテスタントにおいては陸続と聖書の漢訳出版が行われる。漢訳聖書は通常、新約が先に、旧約が後に翻訳出版される。漢訳新約聖書については、多くの場合、福音書の各文書が単巻として漢訳出版され、その後、四福音書としてまとめて出版される。福音書以外は、使徒行伝、ローマ書など比較的分量の多い文書はそれぞれ単巻で出版され、その他の比較的分量の少ない文書は、複数の文書をまとめて出版したり、新約聖書のなかに入れて込んで出版したりしている。キリスト教の聖典である聖書の漢訳は、翻訳者によってそのプロセスに違いは見られるが、複数の段階と何重ものチェックが行われて完成されていることは共通している。漢訳聖書にある文書が単巻で出版される意義は、神のことばをいち早く多くの人々に届けたいという思いもあったかと推察されるが、その後出版する四福音書や新約聖書をより完成度の高いものとするための訳文のチェック機能を担っていることにあると考えられる。また、新約聖書として完成して数回にわたり出版される場合においても、単に重版する場合のみならず、その都度改訂が施されて出版が行われることもある。

本研究では、初めて新約聖書を「浅文理」訳で翻訳したグリフィス (John Griffith) による『新約全書』の複数の版本の本文を考察することにより、その版本の類型化を試みるとともに、各版本における本文の異同箇所からグリフィスの浅文理という言語体に対する認識を明らかにしたい。なお、本研究は、平成27年度～29年度科学研究費課題「19世紀～20世紀における漢訳新約聖書の聖書語彙に関する訳語の通時的比較研究」(課題番号：15K02512)におけるグリフィス訳 浅文理新約聖書の聖書語彙を抽出する際の抽出元の選定に資するものとなる。

*福井大学教育地域科学部人間文化講座

1. 漢訳聖書翻訳者グリフィスについて

浅文理訳新約聖書を初めて完成させたグリフィスは、英国倫敦会（London Missionary Society）の宣教師である。グリフィスは1831年12月14日、英国ウェールズのスウォンジー（Swansea）で、ビビアン・アンド・サンズ（Vivian & Sons）で働く父のもとに生まれた。その翌年の1832年に母親がコレラに罹患して召天、以降は父親の姉が母親代わりとなる。

グリフィスは8歳のときにスウォンジーのエベニーザ（Ebenezer）にある教会の教会員となる。彼は14歳で説教を始め、さまざまな教会から招きを受ける。1849年には父親も母親と同じくコレラにより召天。1850年9月から1854年1月まで、グリフィスはブレコン・カレッジ（Brecon College）で学ぶこととなるが、1853年3月からは倫敦会での奉仕も行うこととなる。彼は当初、マダガスカルを宣教地とすることを望んでいたが、ラナヴァロナ女王によりマダガスカルへの門戸が閉じられ、それによってグリフィスは中国へ向かうこととなる。1855年4月6日のイースターには、スウォンジーのEbenezer Chapelで彼の按手礼式が執り行われた。さらにこの按手礼式の後の4月13日には、グリフィスはマダガスカル宣教に従事していたグリフィス牧師（David Griffiths）の娘であるマーガレット・グリフィス（Margaret Jane Griffiths）と結婚。そして、グリフィスとその妻はウィリアムソン牧師（Alexander Williamson）夫妻とともに、1855年5月21日に上海に向けて出発した。ロンドンからアフリカの喜望峰を経由し、およそ9ヶ月を経た1855年9月24日、グリフィス夫妻を乗せた540トンの木造船ハミラ・ミッチェル号（Hamilla Mitchell）は上海に到着する。その後1860年までは上海を拠点にして、その周辺地域においても宣教活動を行った。第二次アヘン戦争後天津条約が締結され、1861年3月に漢口が実質的に開港されると、グリフィスは早くもその約3ヶ月後には漢口に入った。その後1年にも満たない1862年3月には彼の宣教活動はその実が与えられ、華中地域で初めてとなるバプテスマ式が執り行われた。さらには、その約40年後の1905年には8000人の教会員を抱えるほど教会が成長している。このように、グリフィスは直接伝道に賜物を有していただけでなく、漢訳聖書の翻訳者としても豊かに用いられた。実際に浅文理訳や官話訳の新約聖書を翻訳出版しているだけでなく、官話和合訳の翻訳委員会からグリフィスは翻訳者として参加するよう求められたのである。グリフィスは60年近く中国で活動を行い、1912年1月に中国から英国ロンドンに帰国、7月25日に80歳でその地上での生涯を終えて天に召された。

グリフィスの印象について、彼とともにロンドンから上海へ旅を共にしたウィリアムソン牧師は次のように記している¹⁾。

Mr. John is a Welshman; nervous; well informed; judicious; diligent (*sic*); persevering; rather dogmatic; not very generous but rather closed-minded. I think we may work together; but I fear we can never. …… I earnestly pray God that we may be able to suit ourselves to each other and that no root of bitterness may spring up to trouble us.

このようにウィリアムソンはグリフィスについて、学識があり、聡明かつ勤勉で、忍耐強い人であるという印象を持つ一方で、やや独善的で了見が狭い人であるとも感じており、堅い友情を結ぶことができるか心配している。そして、ウィリアムソンは真剣にグリフィスとの人間関係がうまくいくよう神に祈りをささげている。ウィリアムソンが述べているこのようなグリフィスの人柄は、後に見られる彼の聖書漢訳姿勢や官話和合訳の翻訳委員就任固辞などに関係しているのではないかと思われる。

2. 「Easy Wen Li (浅文理)」という言語体の呼称について

新約聖書を最初に「Easy Wen Li (浅文理)」に漢訳したのはグリフィスであるが、この「Easy Wen Li (浅文理)」という言語体の呼称について、彼はどのように認識していたのであろうか。グリフィスが聖書を浅文理に訳そうと思いついたのは、文理訳があまりにも難解であるが、官話訳は地域性が強すぎるという認識によるものであった。1861年以後、主に漢口で活動していたグリフィスにとって、官話は北方的色彩の濃い言語体であると考えたのであった。こうしてグリフィスは、文理を平易化した「Easy Wen Li (浅文理)」という言語体で聖書を翻訳することとしたのである。

「Easy Wen Li (浅文理)」とはその名のとおり平易な「文理」の意であり、「文理」を基礎とした言語体であると考えられる。「文理」という語はプロテスタント系欧米人の間で一般的に用いられていた「文言」に対する呼称であり、この語はモリソンの華英字典『五車韻府』(1819年)や1822年の英華字典にも見られる。この「文理」を平易化したものが「Easy Wen Li (浅文理)」という言語体である。聖書の漢訳において、「Easy Wen Li (浅文理)」という言語体によって翻訳された新約聖書は、1885年に出版されたグリフィスによるものが最初とされている。しかし、1885年のグリフィスによる浅文理訳の新約聖書の扉には訳出された言語体は明記されておらず、表紙にある表題には「新約全書 文理」と記されている。また R. W. Thompson 1908 でも、グリフィスが1888年に行われた宣教会議への参加辞退に関連した箇所で、グリフィス自身の言葉を次のように引用している²⁾。

'I am revising my Wen-li version of the New Testament and turning it into Mandarin. This I must finish before I leave China.'

ここにも「Easy Wen Li (浅文理)」という語はなく、「Wen-li」のみが見られる。Spillette 1975 および Draw & Moule 1903をはじめ、賈立言・馮雪冰 1934 などにも、グリフィスが文理訳の新約聖書を出版したという記録がないことから、ここでグリフィスが述べている「Wen-li」は「Easy Wen Li (浅文理)」のことであると思われる。このことから、グリフィスが「浅文理」を新たな独立した言語体ではなく、あくまでも「文理」の亜種として認識していたことが分かる。

それでは、「Easy Wen Li（浅文理）」という呼称はいつごろから使われるようになったのであろうか。それは遅くとも、グリフィスが1885年に浅文理訳の新約聖書を出版した翌年の1886年には使用されている³⁾。しかし、グリフィスの1886年版、1889年版、1898年版の浅文理訳新約聖書の扉にはやはり言語体の記載はなく、表紙の表題は1886年版および1889年版では確認できず、1898年版でも「新約全書 文理」となったままである。

3. グリフィスによる浅文理訳新約聖書について

Draw & Moule1903によると、グリフィスによる漢訳新約聖書は浅文理訳が1885年に初めて出版され、その後は1886年、1889年、1894年、1899年に出版されたことになっている。このうち、1889年に出版されたものは改訂版とされている。なお、文理訳の出版記録は見られない。またSpillette1975においてもやはり文理訳が出版された記録は見られず、1885年に浅文理訳の新約聖書が出版され、その後は1886年、1889年、1894年、1898年、1899年にそれぞれ出版されたとしている。このうち、1889年に出版されたものは改訂版であるとされている。このSpillette1975の記載は、浅文理訳の1898年と官話訳の1899年と1901年を除いて、Draw & Moule1903の記載と一致している。

つまりDraw & Moule1903とSpillette1975から、まずグリフィスは文理訳の新約聖書を出版しておらず、浅文理訳の新約聖書については1885年に初版が出た後、1886年、1889年、1894年、1898年、1899年にそれぞれ出版され、1889年版は改訂版であるということが分かる。1889年版については、賈立言・馮雪冰1934でも同じように改訂版であることが記されている⁴⁾。

3.1 1885年版から1886年版への異同について

本研究では、各版本間の本文の異同箇所からグリフィスによる浅文理訳新約聖書の版本の類型化を行うとともに、グリフィスの浅文理という言語体に対する認識について明らかにしていくが、Draw & Moule1903とSpillette1975に記載されている6種の版本のうち、1894年版と1899年版については未見のため、1885年版と1886年版、1889年版、1898年版の4種について、マルコの福音書の1章から4章までの本文から考察を行うこととする。

『馬可福音』の第1章から第4章は、第1章が45節、第2章が28節、第3章が35節、第4章が41節で、全149節となっている。このうち4種類の版本間では約68%にあたる101節にわたる異同を確認した。初版である1885年版とその翌年に出版された1886年版の異同箇所は全149節のうちの6節9箇所見られる。節数のレベルでは全体の4%に過ぎず、両者が大きく異なる訳文であるとは考えられない。以下にこの6節9箇所を示して考察を行うが、上段は1885年の初版の本文、下段は1886年版の本文であり、括弧内は章節を示し、下線部は論者によるものである。

- (1) 在彼處四十日、見試於撒但、與野獸同在、有天使服事之、

在彼處四十日、見試於撒但、與野獸同在、天使服事之、(1:13)

- (2) 衆驚異而相問曰、此何也、此何新訓也、彼以權命邪鬼、鬼亦順從之、
衆驚異而相告曰、此何也、此何新訓也、彼以權命邪鬼、鬼亦順從之、(1:27)
- (3) 耶穌嚴戒之、即遣之去、曰、
耶穌嚴戒之、遣之曰、(1:43)
- (4) 有人帶一患癱瘋者就耶穌、用四人擡之來、
有人帶一患癱瘋者、就耶穌、用四人擡之、(2:3)
- (5) 法利賽人向耶穌曰、視哉、彼等於安息日行所不當行、何也、
法利賽人向耶穌曰、視哉、彼等於安息日、行所不當行、何也、(2:24)
- (6) 播之時、有落於路旁者空中之鳥至、盡食之、
播之時、有落於路旁者、空中之鳥至、盡食之、(4:4)

これらの異同箇所は読点の追加によるものが3箇所、読点および字の削除によるものが5箇所、語の置き換えによるものが1箇所となっている。また、異同箇所は多くは1節に1箇所という極めて単純な異同にとどまっている。異同箇所が1節に3箇所見られる例(3)でも、「即遣之去、曰、」から「遣之曰、」に向けて、「即」と「去」の削除、「、」の追加という単純な操作が累積しているにすぎない。この箇所は、初版がブリッジマン訳の「遂遣之去、謂之曰、」に近く、1886年版が代表訳の「遣之曰、」と同様の訳となっている。

文のなかの区切りについては、必ずしもギリシア語の原文の区切りに基づいているわけではないために異同が生じている。つまり、この読点による区切りは中国語という言語に由来するものであり、グリフィスは代表訳やブリッジマン訳などの先行する漢訳本も参照しつつ、彼自身の語感に基づいて付加されたものと考えられる。

また、例(1)の異同は、ギリシア語の原文にはなく、中国語の問題である。代表訳およびブリッジマン訳には付されておらず、北京委員会官話訳では「他在那裏、住了四十日、受撒但的試探、和野獸同住、並且有天使服事他。」と「有」が付されている。

例(2)の「相問」(1885年版)から「相告」(1886年版)への修正については、ギリシア語の「συζητεῖν」が「論争する」、「協議する」の意で、直接的には「問」の意味が含まれないためであると思われるが、代表訳とブリッジマン訳は「相問」とし、北京委員会官話訳でも「彼此問」と訳出されている。1886年版の後の1889年版、1898年版では、1885年初版および他の漢訳本と同

じく「相問」としている。

例（4）にある初版の「來」は、代表訳の「有癡瘋者、四人舁之來、」の「來」に起因しているものと思われるが、「用四人擡之來」として用いると極めて不自然な中国語となる。この形を残すとすれば、「用四人擡之而來」と「而」を加えるのが妥当かと思われるが、そうなりといささか冗長な表現となってしまう。そのため、1886年版では「來」の削除という処置を施したものと考えられる。

このように考察してみると、初版の1885年版と1886年版については、その本文の異同箇所の数および異同内容から、両者が大きく異なった訳文であるとは認められない。つまり、1886年版は1885年版のマイナーチェンジに過ぎず、1886年版の本文は1885年の改訂というよりも修正というべきもので、初版系の訳文であると判断することができる。

3.2 1886年版から1889年版への異同について

次に第2版の1886年版から第3版の1889年版への本文の変更箇所の考察を行う。このうち、1889年版はDraw & Moule1903とSpillette1975によって改訂版とされている版本である。この両者の異同は、節レベルでは49節と初版から第2版の約8倍にのぼり、全149節の約33%を占めている。こうした異同箇所のある節数の増加量からみると、1889年版は改訂版と言えるのかもしれない。以下に初版系の訳文といえる1886年版と改訂版と称される1889年版の訳文における異同箇所について具体的にみていくこととする。

1886年版と1889年版の異同箇所は49節58箇所を確認した。この異同の特徴として、まず読点の異同が少ないことが挙げられる。先の1885年版と1886年版では、読点による異同が全9箇所のうち4箇所と約44%も占めていたが、1886年版と1889年版では全58のうち7箇所（追加4箇所、削除3箇所）と約12%に低下している。つまり、異同箇所の約88%が語句に関するものとなっているのである。以下に例を挙げるが、上段は1886年版の本文、下段は1889年版の本文であり、括弧内は章節を示し、下線部は論者によるものである。

（7） 今使爾知人子在地、有權以赦罪耳、即向患癡瘋者曰、
今使爾知、人子在地、有權以赦罪耳、即謂患癡瘋者曰、(2:10)

（8） 乃問衆曰、安息日、行善行惡、救命殺命、孰宜、衆皆默然、
乃問衆曰、安息日行善行惡、救命殺命、孰宜、衆皆默然、(3:3)

例（7）と（8）は読点に関する異同で、例（7）は読点の追加で、「今使爾知人子在地」に「、」が追加されて「今使爾知、人子在地」となったもので、例（8）は反対に「安息日、行善行惡」から「、」が削除されて「安息日行善行惡」となったものである。

- (9) 惟其内無根、則亦暫時耳、及至爲道遇患難、受逼迫、遂厭而棄之、
惟其内無根、則亦暫時耳、及至爲道而遇患難、受逼迫、遂厭而棄之、(4:17)
- (10) 爾宜聽之哉、有播種者出而播種、
聽之哉、有播種者、出而播種、(4:3)
- (11) 衆甚驚懼、互相告曰、此何人也、風與海亦順從之、
衆甚驚駭、互相告曰、此何人也、風與海亦順從之、(4:41)

例(9)から(11)は語句に関する異同である。例(9)は「而」が追加されたもので、代表訳では「及爲道而遇難窘逐」、ブリッジマン訳では「及爲道而遇患難」と「而」が付されている。例(10)は「爾」と「宜」が削除されたものであるが、これは代表訳では「聽之哉、」に、ブリッジマン訳では「聽哉、」にそれぞれ訳出されている。例(11)は「驚懼」から「驚駭」に置換されたものを示しているが、代表訳とブリッジマン訳ではともに「衆甚駭、」と「駭」を用いている。このようにグリフィスは浅文理の訳文の変更にあたり、先行する文理による代表訳やブリッジマン訳を参照している可能性が高いことが分かる。

また、1886年版から1889年版の異同箇所全体からみると、無の状態から単純に読点や語が追加されたことによる異同は12箇所(約21%)、既にある読点や語を単純に削除したことによるものは18箇所(約31%)、語の足し算や引き算とは異なる言い換えや置換による異同が28箇所(約48%)にのぼっている。1885年版と1886年版では追加や削除といった文字の足し算、引き算で多くが占められていたが、ここでは語句の言い換えや置換による異同が最も多くなっていることがわかる。もちろん『馬可福音』の1章から4章という限られた範囲内でも49節58箇所のにぼる多くの異同箇所が見られるように、変更箇所数が多いということもあろうが、こうした語句の言い換えや置換による異同が多いという、異同の質という観点からも1889年版を改訂版とする根拠となったのではないだろうか。しかし、1886年版から1889年版への改訂は数こそ多いが、その質については語の置換といった単純な改訂手法が多く見られ、語順など句の構造を大きく変更するような改訂は少ない。

- (12) 耶穌於利未家坐席、有多稅吏及罪人、偕耶穌與門徒坐、蓋其人衆、且從之也、
耶穌於利未家坐席、有多稅吏及罪人、偕耶穌與門徒坐、因其從之者衆也、(2:15)
- (13) 蓋耶穌醫人已多矣、故凡有疾者、皆逼近欲摸之、
蓋耶穌曾醫多人、故凡有疾者、皆逼近欲摸之、(3:10)

例（12）と（13）は単なる語の置換にとどまらない構造的な改訂が施されたものである。しかしながら、この種の改訂においても節全体の訳文を変更したり、3句以上にわたるような複雑な改訂は見られない。

以上のように、初版系の1886年版と改訂版と称される1889年版との異同箇所を考察することにより、語句の言い換えや置換が他の追加や削減という語の足し算、引き算の処置に比べて20%～30%も多い約48%にのぼることが明らかとなった。このことは、浅文理という言語体に対するグリフィスの認識に変化がないことを示している。つまり、浅文理という言語体の観点からみると、1885年の初版から1889年の第3版までに大きな変化は認められないと言うことができる。

3.3 1898年版の特徴について

これまで1885年の初版から1886年の第2版、1889年の第3版の聖書本文の異同箇所から各版の特徴を考察してきた。Draw & Moule1903やSpillette1975によると、この後に1894年版が存在しているようであるが、現時点では未見である。そのため、本研究ではさらにその後の1898年版と1889年版との比較を行い、その異同箇所から1898年版の本文の特徴を明らかにする。

1889年版と1898年版の異同箇所は83節135箇所¹⁾にのぼる。節レベルだと全149節のうち約56%を占めている。また、これは1886年と改訂版と称される1889年版との間の異同箇所の1.7倍である。Draw & Moule1903やSpillette1975では1889年版のみが改訂版としているが、節数と異同数からみると、1898年版は1889年版にもまして改訂が施されていることになる。

1889年版と1898年版の異同内容の特徴としては、1889年版にある既存の読点および語を削除した引き算の処置が70箇所と全体の半数をこえる約52%を占めていることが挙げられる。1886年版と1889年版では言い換えや置換による異同が約48%と最も多かったが、ここでは44箇所²⁾で約33%まで低下している。また、無の状態から読点や語が追加されたことによる足し算の異同は21箇所³⁾で約16%にとどまっている。以下に例示をしながら考察をすすめるが、上段は1889年版の本文、下段は1898年版の本文であり、括弧内は章節を示し、下線部は論者によるものである。

- (14) 期已満矣、上帝國近矣、爾等宜悔改、信福音、
期已満矣、上帝國近矣、爾宜悔改、信福音、(1:15)
- (15) 耶穌答曰、上帝國之奧妙、乃賜爾知之、惟於外人、則以譬言、
耶穌曰、上帝國之奧、乃賜爾知之、惟於外人、則以譬言、(4:11)

例（14）、（15）は単純に語が削除されたものである。例（14）では複数形を意味する「等」が削除されている。この箇所は代表訳では「宣悔改信福音。」と主語が訳出されておらず、ブリッジマン訳では「爾宜悔改、信福音。」と明確に複数形を表していない。しかし、原文のギリシア

語では「μετανοείτε」と複数形になっているし、グリフィスの官話訳でも北京委員会官話訳と同じく「你們應當悔改、信福音、」と複数形で訳出されている。つまり、グリフィスはここで「等」を削除しても、「爾」を複数形の「爾」として認識していたということである。これはグリフィスの浅文理という言語体が文理化していることを示している。このことは例(15)でも同じように指摘することができる。例(15)では「答」と「妙」がそれぞれ削除されているが、代表訳ではこの部分は「耶穌曰、上帝國之奧、」と訳出され、ブリッジマン訳では「耶穌謂之曰、神國之奧義、」となっている。グリフィスはブリッジマン訳のように「謂之曰」、「奧義」とそれぞれ訳出できるにもかかわらず、文理化の度合いが強い代表訳のように訳出している。なお北京委員会官話訳では「耶穌回答說、上帝國的奧秘、」と訳出され、ともに二音節化している。

- (16) 由此稍前行、又見西庇太之子雅各、與雅各之弟約翰、在船補網、
由此稍前行、又見西庇太之子雅各、與雅各之弟約翰、在舟補網、(1:19)

- (17) 蓋耶穌曾醫多人、故凡有疾者、皆逼近欲摸之、
蓋耶穌醫人甚多、故凡有疾者、皆逼近欲捫之、(3:10)

例(16)、(17)は44箇所、約32%を占める言い換えや置換による異同の例である。例(16)では同じ字数で「船」を「舟」に置換している。この部分は代表訳、ブリッジマン訳ともに「在舟補網」と「舟」を使用していることから、1898年版が1889年版に比べ文理化していると言える。例(17)は言い換えによる異同の例で、口語的な「曾醫多人」を「醫人甚多」と文理化させている。これは代表訳の「蓋耶穌醫人甚多」と一致している。なお、北京委員会官話訳は「耶穌醫好許多人」と訳出し、1889年版の訳に近い。つまり、前述の既存の読点および語を削除した引き算による異同と同様に、ここでも1898年版のグリフィスの浅文理体が文理化していることが確認できる。

- (18) 彼遂棄網從之、
遂棄網而從耶穌、(1:18)

- (19) 法利賽人謂耶穌曰、視哉、彼於安息日行所不當行、何也、
法利賽人謂耶穌曰、彼於安息日、所行不當行、何也、(2:24)

例(18)、(19)は21箇所、約16%を占める無の状態から読点や語が追加されたことによる足し算の異同の例である。例(18)では「網」と「從」の間に「而」が追加され、例(19)では「日」と「所」に読点が挿入されている。例(18)では「耶穌」を入れることによる句の長さの

冗長さを消すために「而」を追加したものと思われる。代表訳では「遂棄網從之。」とあり、ブリッジマンでは「彼即棄其網而從之。」と「從」より前が代表訳より2字多いために「而」が付されている。例（19）は読点を入れて分句しているもので、足し算の異同21箇所のうち14箇所、約67%を占めている。読点を追加して分句するということは通常、1句あたりの字数が減るということにつながる。つまり、読点の追加は文理化につながるということである。この箇所は代表訳では「彼於安息日、何爲所不當爲乎。」とし、ブリッジマン訳でも「彼於安息日、行所不宜行者、何也。」と読点を施している。一方、口語的な北京委員会官話訳では「他們在安息日作不當作的事、是爲甚麼呢。」と分句されていない。

このように、グリフィスの1898年版はそれ以前の訳文に比べて大きな変化が見られた。それは改訂版とされる1898年版よりも大きな改訂であり、それまでのグリフィスの浅文理という言語体からさらに一歩踏み込んだ文理体に近いものとなったと言える。

3.4 グリフィスの改訂理由について

これまでの考察のように、Draw & Moule1903やSpillette1975で改訂版とされる浅文理訳本が出版された後もグリフィスは浅文理訳聖書の本文に手を加え続けた。1885年の初版から4年という歳月を費やして改訂版を完成させたはずであるが、グリフィスはさらに引き続いて改訂を加えているのである。これは遅くとも1898年まで続いており、1885年の初版出版から13年もの歳月にわたっていることになる。これは通常の漢訳聖書の翻訳とは異なるようである。また、グリフィスは1887年に官話訳の四福音書を出版し、1889年と1893年に新約聖書を出版している。このことから、グリフィスは1887年までに官話訳に着手しているはずであり、官話訳の新約が1889年に出版されていることを考えると、グリフィスは1886年版あるいは1889年版の浅文理訳から官話訳に訳出しているものと思われる。つまり、浅文理訳本としては1889年版でおおよそ完成していたのではないかということである。それにも関わらずグリフィスはさらに改訂をすすめ、訳文の文理化を行った。グリフィスが少なくとも1898年版までこだわった理由とはいったい何であろうか。

Zetzsche1999によると、グリフィスの浅文理による初めての新約聖書はその出版後、批判を受けている。その理由として訳文の意識の問題もあるが、より大きなものとして訳文が単に北京委員会官話訳を浅文理に焼きなおしただけではないかという疑いであった⁵⁾。グリフィスの浅文理訳が単に北京委員会官話訳の焼きなおしたものではないと考えるが、確かにそれを疑われるような箇所は多々見られる。以下に例を挙げるが、初段は1885年版、2段は1886年版、3段は1889年版、4段は1898年版、5段は北京委員会官話訳、6段は代表訳、7段はブリッジマン訳を示し、括弧内は章節を示している。

（20） 耶穌云此、因人言其乃被邪鬼所附者、

耶穌云此、因人言其乃被邪鬼所附者、
 耶穌云此、因人言其乃爲邪鬼所附者、
 耶穌因人言其爲邪鬼所附、故言此、
 耶穌說這話、因爲人說他是被邪鬼附著的。
 耶穌以人言其爲邪神所憑、故言此。
 因衆言其爲汚鬼所憑、故言此。(3:30)

- (21) 耶穌答云、誰爲我之母、誰爲我之兄弟、
 耶穌答云、誰爲我之母、誰爲我之兄弟、
 耶穌答云、誰爲我之母、誰爲我之兄弟、
 耶穌曰、誰爲我母、誰爲我兄弟、
 耶穌回答說、誰是我的母親、誰是我的弟兄。
 耶穌曰、何者爲我母我兄弟耶。
 耶穌答之曰、何者爲我母、爲我兄弟乎。(3:33)

例(20)は1885年版と1886年版は同じ訳文で、1889年で「被」が「爲」に改訂され、さらに1898年版では「耶穌因人言其爲邪鬼所附、故言此、」と大幅に改訂されている。この箇所のお話訳は「耶穌說這話、因爲人說他是被邪鬼附著的。」で、訳文の「說這話=云此」、「因爲=因」、「人=人」、「說=言」、「他=其」、「是=乃」、「被=被」、「邪鬼附著的=邪鬼所附者」はほとんど一致対応しているが、代表訳やブリッジマン訳とは異なっている。しかし、1898年版の訳文は代表訳とブリッジマン訳と類似している。

また例(21)でも1885年版、1886年版、1889年版はお話訳の「耶穌回答說、誰是我的母親、誰是我的弟兄。」と「回答說=答云」、「是=爲」、「我的母親=我之母」、「我的弟兄=我之兄弟」というように明確な対応関係が見られる一方、代表訳やブリッジマン訳とは異なっている。しかし、1898年版では「答」や「之」が削除されて代表訳に類似している。

このように、グリフィスは訳語の意識の問題の解決とお話訳の焼きなおしという疑念を払拭するために、改訂を行っていたのであろう。このように考えれば、1889年の改訂版の完成以後も改訂を行っていたこと、また1898年版における文理化と大幅な改訂も理解することができる。

おわりに

これまでグリフィスの4種の浅文理訳本をそれぞれ比較しながら、その特徴について考察を行ってきた。まず初版の1885年版と第2版の1886年版には異同箇所も少なく、訳文に大きな違いは認められなかった。つまり、1886年版は1885年版の微修正版と言うべき版本であり、改訂版とまでは言えないものであった。さらに、改訂版と称される1889年版については訳文の変更箇所

が大きく増加していることが認められたが、1889年版と1898年版との異同箇所よりもその数が少ないうえに、浅文理という言語体に影響するような変更も見られなかった。この1898年版について、Draw & Moule1903やSpillette1975ではこの版本だけに改訂版という注が付されているが、変更箇所の質という観点から見れば、この1889年版は修正版の域を出るものではないと言える。1898年版については、それ以前の版本よりも変更箇所が多い上に大きく文理化が行われており、それ以前のグリフィスの浅文理という言語体とは大きく異なったものとなっていることが明らかとなった。この1898年版も改訂版と称するに相応しい版本なのである。

グリフィスは初めて浅文理訳の新約聖書を1885年に完成させた。その後、他の漢訳聖書と同じようにグリフィスは修正・改訂を行っている。初版が出版された翌年の1886年には第2版、さらに3年後の1889年には改定版を出版している。しかし、グリフィスの浅文理訳本が通常と異なるのは、1889年の改訂版を出版した後の1894年、1898年、1899年と10年にもわたり出版が行われている点である。1894年版と1899年版は未見であるが、これまでの考察からこの2つの版本にも修正・改訂が行われている可能性が高いと言える。特に1894年版は1892年にグリフィスが官話訳の新約聖書を出版していることを考えると、1898年版と同じように大きく文理化されたものであることが予想される。

このような長期にわたる修正・改訂がなされたのは、グリフィス自身から出た漢訳者としての訳文の精確性を高めたいという自律的な思いと、それに加えて第三者からの意識や官話訳の焼きなおしではとの疑念を払拭するためという他律的な要因によるものであると考えられる。また、この長い道のりというのはまさにグリフィス自身が浅文理という言語体を模索してきた痕跡を示している。そもそも浅文理は1880年代になって現れた新しい概念であり、その定義づけに幅や変動があることはやむを得ないところである。

このような状況で漢訳出版されたグリフィスの浅文理訳本は、現時点では1889年以前の版本と1898年の版本に分けることができる。1889年までのグリフィスの浅文理は北京委員会官話訳に影響されたような口語的色彩の強い言語体であったが、1898年以後では文理代表訳やブリッジマン訳と類似した文理的色彩の強い言語体となったのである。現時点において、各版本の特徴とその変遷をふまえると、グリフィスの浅文理訳本として1889年版と1898年版のどちらが優れた正しい浅文理訳かと言うよりも、両者を代表的な浅文理版本として採るのが妥当ではないかと考える。

最後に、本研究はJSPS科研費15K02512の助成を受けたものであることを申し述べておく。

注

- 1) Paul King 1936 の 28 頁を参照。
- 2) R. W. Thompson 1908 の 428 頁を参照。
- 3) C. W. Mateer 1886 の 51 頁を参照。
- 4) 賈立言・馮雪冰 1934 の 53 頁では、このほかにラトー (Latourette) 牧師の記述で 1886 年が完訳の日時とされているが、それは改訂の日時なのかもしれないと指摘されている。
- 5) J. O. Zetzsche 1999 の 165 頁を参照。

参考文献

1855. 『新約全書』(文理代表訳)。香港：英華書院。
1869. 『新約全書』(ブリッジマン文理訳)。上海：美華書館。
1872. 『新約全書』(北京委員会官話訳)。上海：美華書館。
- 楊格非 1885. 『新約全書』(表紙は『新約全書 文理』)(オーストラリア国立図書館版)。
- 楊格非 1886. 『新約全書』(台湾聖經公会版)。漢鎮：英漢書館。
- 楊格非 1889. 『新約全書』(オーストラリア国立図書館版)。漢鎮：英漢書館。
- 楊格非 1892. 『新約全書』(官話訳)。漢鎮：英漢書館。
- 楊格非 1898. 『新約全書』(表紙は『新約全書 文理』)(オーストラリア国立図書館版)。漢鎮：英漢書館。
- 施約瑟 1902. 『新約聖經』(浅文理訳)。上海：大美国聖經会。
- R. Morrison. 1819. *A Dictionary of the Chinese Language, in Three Parts. Part II - Vol. I* (五車韻府) : The Honorable east India Company's Press, Macao. (馬礼遜 2008. 『華英字典 4 (影印版)』。鄭州：大象出版社。)
- R. Morrison. 1822. *A Dictionary of the Chinese Language, in Three Parts. Part III* : Black, Parbury, and Allen, London. (馬礼遜 2008. 『華英字典 6 (影印版)』。鄭州：大象出版社。)
- C. W. Mateer. 1886. *The Easy Wen Li New Testament, Chinese Recorder Vo. 17*, American Presbyterian Mission Press, Shanghai.
- William Robson. 1888. *Griffith John, Founder of the Hankow Mission, Central China*, S.W. Partridge & Co., London.
- T. H. Darlow & H. F. Moule. 1903. *Historical Catalogue of the Printed Editions of Holy Scripture in the Library of the British and Foreign Bible Society Vol. 2*, Reprint by Kraus Reprint Corporation, New York, 1963
- R. W. Thompson. 1908. *Griffith John - The Story of Fifty Years in China*, The Religious Tract Society, London.
- 賈立言・馮雪冰 1934. 『漢文聖經訳本小史』。上海：広学会。
- Paul King. 1936. *Voyaging China in 1855 and 1904*, Heath Cranton Limited, London.
- Spillett, Hubert . W. .1975. *A Catalogue of Scriptures in the language of China and Republic of China*. British and Foreign Bible Society, London.
- J. O. Zetzsche. 1999. *The Bible in China*, Monumenta Serica Institute, Sankt Augustin.
- H KAINH ΔΙΑΘΗΚΗ*, Trinitarian Bible Society, London. (ギリシア語公認本文)